

Book Review



かかりつけ歯科医からはじめる 口腔がん検診 Step 1・2・3

柴原孝彦ほか 著



Reviewer

高橋哲夫 Tetsuo Takahashi
(東京都歯科医師会会長)

A4判, 156頁
定価(本体5,600円+税)
医歯薬出版刊



2013年10月に発刊された本書は、故・浅野紀元前東京都歯科医師会会長、柴原孝彦東京歯科大学教授をはじめ、口腔外科を中心とした多くの先生方の思いが込められた一冊である。当時、東京都歯科医師会の副会長であった筆者に、「自分の親しい患者が口腔がんを患い、手術の結果、顔が著しく変貌してしまった。その方の心情を思うとなぜ早く発見できなかったかいたたまれない気持ちになる」と浅野氏は述懐していた。筆者も35年の開業歴で口腔がんの疑いで高次医療機関に確定診断を依頼した患者のうち、6例ががんの診断を受けた。内訳は、4例が扁平上皮がん、2例が舌がんであった。

全がん症例のなかで口腔がんは1～2%とされている。ただし、口腔がんの推測患者数は、1975年に2,100人、2005年には6,900人、2015年では7,800人と推測されている。患者の意識もマスコミの報道等により少しずつ変化してきている。「口腔内の症状ががんではないかと心配で夜も眠れな

い」と訴えてくる患者もいる。近年、患者の権利意識も高まり、悪性腫瘍を見逃したと医療者に対する訴訟も絶えない。疑いをもった際は高次医療機関に紹介するのも義務とされている。しかし、それだけではなく確定診断をしてあげるにより、患者の心の平穏は代えがたいものになる。

このような社会環境のなかで、口腔内をしっかりと診る立場にあるのは歯科医師すなわち「かかりつけ歯科医」である。どうかすると歯牙疾患、歯周病のみに気がいきがちであるが、口腔内全体を診ることが必要なことは言うまでもない。歯科医師に対して在宅診療を含め医科歯科連携ならびに多職種連携が求められるなか、口腔を通じ全身を診ることの必要性が社会的にも求められている。

本書は徹底して開業医の目線で書かれている。項目もわかりやすく分類され、的確な症例とともに画像も鮮明で視覚で捉えやすくなっている。検診から専門医への紹介、そして今課題と

なっている周術期の口腔ケア対策については歯科衛生士の立場からの提言や地区歯科医師会としてのアプローチ方法など、現場の声が反映されている。また、口腔がん検診のこれからの方向付け、かかりつけ歯科医や地区歯科医師会の役割、行政とのかかわり方などの模範例も示され、口腔がん検診における今後のあり方が明示されている。

東京都においては検診事業を区市町村に移管しているため、都自身が直接検診事業をすることはない。しかし、啓発事業には助成をいただき、講習会などを東京都歯科医師会事業として展開している。こうした事業が地区歯科医師会を通して区市町村における口腔がん検診への展開を促すことを願っている。

歯科医師自身がスキルアップすることは当然だが、患者に口腔がんの疑いをもったとき、その後の方法を確認するためには本書の内容は実に的確である。診療室に一冊、常に手元に置いておきたい書物である。